

落語娘

2008(平成20)年6月27日鑑賞〈GAGA 試写室〉

★★★★



監督＝中原俊／原作＝永田俊也『落語娘』（講談社刊）／出演＝ミムラ／津川雅彦／益岡徹／森本亮治／利重剛／伊藤かずえ／絵沢萌子／なぎら健壱（日活配給／2007年日本映画／109分）

……落語モノは面白い。劇中劇モノは面白い。さて、『落語娘』はそんな「2つの伝統」を無事キープ……？ それがポイントだ。見モノは津川雅彦師匠演ずる『緋扇長屋』の一席だが、師匠の指導よろしき(?)を得て、ミムラも女前座として大ハッスル！ 2つの伝統は無事クリアできたのでは……？ すると、『落語娘』は『この胸いっぱいのお愛を』（05年）に続く、ミムラの2本目の代表作に……？

■ 伝統をキープ その1——落語モノは面白い！

「そ〇と外（そと）は、一字違いで大違い……？」そんなキワドイ導入部から始まり、私が「こんな映画、最高！」と絶賛したのがマキノ雅彦の初監督作品『寝ずの番』（06年）（『シネマルーム15』433頁参照）。これによって、「落語モノは面白い！」ことが実証されたためか(?)、続いて『しゃべれども しゃべれども』（07年）がつくられたが、これもなかなかのものだった（『シネマルーム18』140頁参照）。この2つの映画によって、前座、二ツ目、真打ちという身分制度を中心とする落語界のシステムや、師匠間の権力闘争(?)の内幕がほぼ明らかに……。

『シネマ18』には、「落語のエッセンスが詰まった作品」というテーマで、『しゃべれども しゃべれども』の他、『歓喜の歌』（07年）と『やじきた道中 てれすこ』（07年）を収録したが、それはなぜ……？ それは是非『シネマ18』で。そんな中、永田俊也の原作を『12人の優しい日本人』（92年）などの中原俊監督が映画化したのが、さてその面白さは……？

「落語モノは面白い！」という伝統を、ちゃんとキープできただろうか……？

伝統をキープ その2——劇中劇モノは面白い！

「劇中劇モノは面白い！」は私の持論だが、それは①『恋におちたシェイクスピア』(98年)、『王の男』(05年) (『シネマルーム12』312頁参照)、③『カミュなんて知らない』(05年) (『シネマルーム10』164頁参照)、『ウインターソング』(05年) (『シネマルーム17』469頁参照) 等によって私の確信になっている。なぜ、劇中劇モノが面白いのかはそれぞれの映画の評論を読んでもらいたいが、『落語娘』にも一部そんな劇中劇が。

テレビ出演中に「政治家は落語家以上にウソつき」との大胆発言をしたうえ、現職大臣のクビを絞めるというあまりにも過剰なおふざけ演出をしたため、目下無期限謹慎中とされているのが、かつては“新作の平左”と呼ばれた三々亭平左師匠(津川雅彦)。この映画後半のハイライトは、そんな落語界の異端児平左師匠が、テレビ局の敏腕プロデューサー古閑由加里(伊藤かずえ)との共同仕掛けで演ずる『緋扇長屋』の高座だが、それを単なる実況中継とせず、劇中劇にすることができるところが映画の面白さ。

「聴き手を安心させる“津川平左”の貫祿」というのが、この映画の落語監修をした柳家喬太郎師匠の評価だが、それが必ずしもごますりや外交辞令と思えないところが、津川雅彦の芸人としての実力であり、奥の深さ。津川師匠による語りと、劇中劇として展開される『緋扇長屋』の面白さ(?)をタップリと楽しみたいものだ。そんな劇中劇をとり入れたこの映画は、「劇中劇モノは面白い！」という伝統を、ちゃんとキープできただろうか……?

『緋扇長屋』とは？

プレスシートによれば、落語には大笑いできる「滑稽噺」やホロリと泣ける「人情噺」の他、背筋を冷やす「怪談噺」という分野がある。そして、『怪談』(07年)の原作となった有名な『真景累ヶ淵』などと並んで、『緋扇長屋』はそんな怪談噺。『緋扇長屋』は、遊び人の若旦那清司がうぶな町娘お加代に一目惚れしたものの、同居人の小梅婆さんに邪魔されたため、悪友の捨五郎と共に清司は邪魔な小梅婆さんをこの世から消すため長屋に火を放つのだが、それによって焼け死んだのは……? というこわーいお噺。また、この怖い『緋扇長屋』については、それを書いた芝川春太郎本人



© 2008「落語娘」製作委員会

をはじめ、これを演じた噺家が次々と怪死したため、以降誰1人高座にかけることがなくなったという禁断の噺。

ところが、落語界から目下無期限謹慎中とされている平左が、自らの命を賭けて(?) テレビのスペシャル番組としてこの『緋扇長屋』に挑戦すると決めたから、弟子の三々亭香須美(ミムラ)はビックリ。そんなことをしたら、ますます平左の立場は不利になるのでは……? 案の定、ライバルの三松家柿紅(益岡徹)はそんな平左の協会からの除籍を狙って動き始めていた。落語界における権力闘争も政治家や弁護士の世界と大同小異(?) だから、遂にこの出演によって平左の噺家生命はジ・エンド……? そのうえ、噺家生命だけではなく、過去いくつかの前例のように平左が高座で怪死してしまう危険があるのでは……? 誰もが一瞬そう思うはずだが、そんな大方の予想を跳ね返すためには、公演を大成功させるしかない。

また、『緋扇長屋』への出演直前に、「お前なんかクビだ!」「とっとと出て行け!」と言われ師匠の家を出て行った香須美のとるべき道は……? そんなこんなの間人間関係と、それぞれの思惑が入り交じる中、平左は無事『緋扇長屋』を演じることができるのだろうか……? そして、香須美と平左の師弟の契りの復活は……?

🎬 ミムラの2本目の代表作に……？

3年前の『この胸いっぱい愛を』(05年)で主演した1984年生まれの女優ミムラについて、私は『海猫』(04年)ではさすがに伊東美咲の美貌の前に一步引いていた(?)が、この映画では、ストレートの長い黒髪をトレードマークとして難病に苦悩する若い女性の姿を体あたりで演じている。……この映画はミムラの代表作となるのでは……？」と書いた(『シネマルーム8』180頁参照)。そんなミムラが、それまでのどちらかと言うとお嬢サマ風の雰囲気捨てて、ひたむきな落語娘をこの映画では熱演。

①男社会の中で女前座として日々誰よりも前向きに頑張る香須美、②最悪の師匠(?)平左にめぐり会った不幸を嘆きつつ、懸命に師匠のために尽くす香須美、③「どだい、女に噺は無理」と言われた平左のライバル三松家柿紅から、平左を捨てて自分のもつとで“正しい噺家の道”を歩むよう説得されたのに対して激しく反発し、思いのたけをぶちまける香須美、そして④『景清』『寿限無』『たらちね』の3題を一生懸命落語娘として演ずる香須美、を見事に演じ分けている。こりゃ、ミムラの第2の代表作になるのでは……？

2008(平成20)年6月30日記

第4章

ザッツ・エンタテインメント

ミニコラム

全盲の落語家に注目！

ミムラ演じた三々亭香須美以外にも女性落語家はたくさんいるが、ここでは音福亭 MAKA (40歳) に注目！中学生の時に右目を失明し、大学入学後左目の視力も失った彼が落語の世界に入ったのは1995年。師匠は手話落語を考案した桂福團治だ。08年5月、友人たちは「MAKA 不思議音福落語を聴いたろ会」を発足させ、10月26日には第1回の落語会が開かれた。将棋の世界では全盲の棋士がいたし、マラソ

ンや水泳でも全盲の選手が大活躍。映画でも、勝新太郎の『座頭市』の跡を継ぐべく、綾瀬はるか主演の『ICHI』が公開され、全盲の女剣士も大活躍だ。落語の語りには音が大切。彼の芸名には「音を追及し、新しい笑いの世界を作り出せ」「摩訶不思議な落語家になってほしい」という師匠の願いが込められている。音福亭 MAKA さん、頑張れ！

2008(平成20)年10月25日記